



2006年 春号 第132号

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長 森下 弘

TEL (082)503-3191

FAX (082)503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

<http://www.wfchiroshima.net>

戦争文化の中で平和の為に働く

ドン・ヘス



WFCでは4月15日フレンドシップアフタヌーンを催しました。国際的活躍の芸術家カディア・キャンノンと、子供の平和教育が専門のスーザン・キャンノンというアメリカ人夫妻によるプレゼンテーションでした。彼らのプレゼンテーションはアメリカの映画館や大学で上映されており、2006年4月5月の2ヶ月間、アジアの芸術家やピースプロジェクトの教育者らとの協力で、日本は京都、広島など、中国は北京、上海を訪れることになったのです。彼らは又、6月にはカナダのカルガリーの国際平和研究会会議で話をし、デンマークの International People's College の平和教育セミナーではその芸術、絵や映画の上映と講演をします。

カディアのプレゼンテーションは、彼の苦悩の芸術シリーズや映画私達の事を語るの誰？からの言葉と絵を使って、ライブのナレーションで戦争の恐ろしさとむなしさを描き出していました。観

客に軍事主義の神話を捨て、平和のパラダイムを受け入れるよう促します。彼の映画は、世界の問題解決に先制攻撃の手法をとるアメリカ政府の政策に疑問を投げかけています。「企業やニューメディアの言う話が、果たして私達の住みたいパラダイムを作ってくれるでしょうか？」

芸術家として彼は、兵士も民間人も等しく蒙るむごい苦しみに対し同情の念を抱き、この憂慮すべき質問を発している「この戦争志向の政策を続けて全世界の安定をそこなうのだろうか？」かれの芸術は、恐怖、怒り、悲しみや同情心をひき起こさせ最終的には、国家間の紛争解決の為に戦争という手段を取る事は止めるとの決断に至らせようというものです。彼の映画のベースである「苦悩の芸術シリーズ」は、アクションの呼びかけであり平和への嘆願です。彼の芸術作品や映画の詳細は、彼のウェブサイトへ：www.jkadircannon.com このウェブサイトで彼の父親、バーノンの事も分かります。原爆開発に関わり、その後核軍縮に努力した人です。バーノンは民間人に対する原爆使用を極めて恐れていました。1947年バーノンにより書かれた文章も、この号にのせています。

スーザン・キャンノンは、小、中学校で25年を越えるキャリアをもつ教師で、子供達が考え、思いやり、正しく、地球的視野を持って行動できるような指導方法を研究開発してきました。彼女のプレゼンテーションには、カリキュラムの中に組み込むの

から、はっきりと別個の戦略まで様々な平和教育の戦略が、学校や教室といった日常的環境の一部である戦略と共に含まれています。生徒からの言葉や写真を使って、歴史、文学、アート、演劇や実践などを利用して平和教育のやり方を示していくのです。教育方法の詳細はスーザンのウェブサイトを訪ねてください。www.teachforpeace.org

キャンノン夫妻は WFC に1週間滞在して山岡さんの被爆証言を始め、阿波さんのガイドで平和公園巡り、多くの理事たちとの意見交換、英語クラスにも加わる外、宮島をはじめ色々歴史的な場所へ足を運ばれました。私達は彼らのお世話ができた事を光栄に思いますし、彼らも広島の新しい友人達に心から感謝していました。



水曜日クラスに生徒達の作品を見せる
スー・キャンノンさん

被爆者は今もなお我々の師

リン・シバーズ

もし私が、被爆者の人で、生涯で初めて自分が被爆者だと友達に告白している人がいると言ったら、あなた方は何と答えますか。そして、多くの被爆者が被爆体験を語るために、海外へ渡航計画を自分で立てていると言ったらどうですか。また長崎の被爆者が奮起し、大きな会議を催したり、核軍縮を促進するために、もっと他の人々に活動を広めようとしていると聞いたなら、なんと言いますか。

「友愛」を読んでいる方は、原爆のすさまじい破壊力と、人間に与えた爆風の被害は、よくご存知だと思います。1986 年以來、私は被爆者に、何が彼らに希望をもたらしたか、聞き取り調査をしました。その結果わかったことに、驚かれるかもしれません。

私は1966年から1967年の1年間、バーバラ・レイノルズと一緒にボランティアで WFC のスタッフとして働きました。被爆者から学んだことで、私はすっかり変わりました。1985年に、短期間ではありましたが、広島に戻ってきました。滞在中、ある被爆者達は1945年のおぞましい出来事の記憶にそれほど拘っていないということが分かりました。このことは、私を驚かせ、もっと知りたいとの思いを強くしました。

その翌年、WFC のアメリカ委員会から、4ヶ月間、臨時の館長になるように要請されました。その間、広島と長崎で40人の被爆者と親しい友人にインタビューしました。下記は、被爆者たちがどのように、自分のために、又世界のために希望を見出していったかの事例です。

ある被爆者にとって、結婚が別段に希望をもたらすことはありませんでした。しかし最初の子供を抱き上げたことは、特別な体験でした。1945年に彼の人生がほとんど終わりを告げかけたときに、彼は新しい命の誕生に貢献できたのでした。

もう一人の被爆者は、重傷で、彼女を動かすのは危険だと人々は恐れていました。彼女が裏庭のむしろに横たわっている時、父親が近所の人に言っている声が聞こえました。「娘を置き去りにはしないぞ。」彼女はお父さんの愛情ある決意にとても感動しました。それが、彼女に生き続けたいという希望を与えました。

多くの被爆者によると、日本の外で、核実験や核兵器備蓄に抗議する平和運動など起きると、世界中に思いを同じくする仲間がいることが分かって、希望を感じるそうです。

この記事を書いている4月、私は8度目の広島訪問をして、被爆者に会っています。(私の旅には長崎も含まれます。)私の何人かの被爆者の友人たちは老人ホームに入居したり、すでに亡くなったりしています。その一方で、何人かの被爆者は活動的になり、核兵器反対と、初めて声を上げている人もいます。何万人という被爆者が、平和公園の中に数年前建てられた、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に、被爆体験記や、遺影や、古い着物の遺品などを寄贈しています。来館者は自分で自由に、検索・閲覧ができるようになっています。

1945年の8月6日にはまだ幼子だった被爆者が、いま体験を語っています。被爆者の反核、反戦の運動は、年が経つと共に変わってきています。しかし彼らの「核のない世界」という目標への、固い決意は弱まることはありません。被爆者は、核戦争の恐ろしさを伝える重要な先生であり続けます。私たちは、まだ彼らから多くのことを学ばねばなりません。

スウェーデン平和行脚の旅

渡辺朝香



焔の中に生まれでた新しき命ヒロシマ〜に始まる「世界の命＝広島の心」の詩、WFC前事長でもあり被爆医療につくされた原田東岷作詞、藤掛廣幸作曲の歌である。世界平和を願うこの歌を今回の旅でも私は被爆者の心に思い重ねたいと歌い続けた。ある時はア・カペラでマリンバの伴奏やピアノの弾き語りそしてCDをBGMとしてその場の状況に応じて歌い続けた。WFC2001年ドイツPAXでの経験を基に被爆者、村上啓子さんのお誘いを受けこの旅に参加したドイツで歌い続けたこの歌をスウェーデンでも私は歌い続けた。

1月29日、成田空港を飛び立ちスウェーデン北方のルレオ空港に降り立つ。深呼吸する空気は冷凍庫並み降りかかる粉雪は結晶模様でしばし見とれる。出迎えてくれた古徳景子さん村上啓子さん私の3人の旅がスタートした。紙面の関係上、いくつかをピックアップしたい。

主にスウェーデン国連支部(FN)企画の各地の学校・集会・コンサートに参加した。教会では(ヒロシマの平和活動のため)にと多くの献金が寄せられたので、私たちはWFCに捧げることにした。小学校での被爆証言の後、8歳くらいの男の子が近寄り村上啓子さんに言った「僕のお父さんはモロッコでブッシュの兵隊に殺された」と…。この言葉を私の中でどう捉えてヒロシマの心に重ねていけるのかが宿題となった。スウェーデン中部に位置するノーベルの終焉地カールスコガではFN主催のセレモニーとコンサートに参加した。プログラムとこの企画に奔走された恵ルンドさんのメッセージを

紹介したい。

メッセージ

武器製造工場のあるカールスコガの町です
が当日は大勢の方が出席されました。広島平和
記念館提供のポスター、写真集や本、パンフレット、
千羽鶴そして”世界中の爆弾を花火に変えて！
(松本涼子作)の タペストリー展示も多くの人々の
目を引きました。平和の思いに胸を熱くするコンサ
ートでした。3人3様の平和使節の方々から心からお
礼を申し上げます。平和について自分達の出来る
事を世界のあちこちの片隅で続けてまいりましょう。

恵ルンド

プログラム(2月5日 市民会館)

Peace – a world free from nuclear weapon
カールスコガ国連支部会長インガブロムグレン挨拶

☆ 「世界の命＝広島」 歌唱 渡辺朝香

☆ 広島の子供たち – 原爆の日のスケッチ
(朗読、スウェーデン語、日本語)

Mike Godfrey

Lisa Lenkel

Simone Martini

☆ 被爆証言「それは広島で 始まった 」村上
啓子

☆ マリンバ演奏「才願ヒ」 マリンバ 古徳景子

打楽器 Daniel Saur

打楽器 Rolf Landberg

歌唱 渡辺朝香

☆ 被爆証言「広島その後、現在の核兵器」村上
啓子

☆ マリンバ演奏「学(gaku)」 マリンバ 古徳景子

打楽器 Daniel Saur

打楽器 Rolf Landberg

☆ 「折り鶴」 歌唱 渡辺朝香

1ヶ月に渡る旅の中で様々なドラマが繰り広

げられた多くの方々との出会いそしてその心に支
えられた感謝の旅であった。音楽と被爆者の「心」
をスウェーデンの「こころ」が結び「平和なる音色」を
学ぶ旅となった。スウェーデンのあの男の子から託
された宿題を広島の人達に伝えなくてはと思う。
「世界の命＝広島」の歌声に包容したいと思
う3月1日、帰り着いたヒロシマは 春の息吹に満
ち溢れていた。

原子、平時において、戦時において

C・バーノン・キャン

ン オークリッジ、クリントン研究所化学部門上級研究員

編集者記: 以下は C・バーノン・キャンが行ったス
ピーチ(circa 1946)の抜粋です。彼は1941年から47
年までグループリーダーとしてマンハッタン計画に関
わり、最初はシカゴ、それからオークリッジとロスアラ
モスで働いた原子力物理学者で、原子力のシベリア
ンコントロールについて話しています。戦後、彼は核
兵器競争を避ける為の努力を、その早い時期に積
極的に行いました。バーノン・キャンは、戦争の恐
ろしさむなしさを表現した絵や映像を作成した芸術家
のカディア・キャンのお父さんです。カディアは、W
FCで4月15日のフレンドシップアフタヌーンでプレゼ
ンテーションを行いました。1ページをご覧ください。

私が研究を続けていくのが、原子力の平和時
の様々な可能性を広げる為に必要、というだけで
あれば良いのだがと思う。それらについて考える
のはエキサイティングで楽しいから。それらは、終
には人間の存在をも脅かす遥かな方向へも行きう
る。然し、人間が平和目的の為に原子を適切に利
用する為には、先ず最初に、全人類を破滅させ地
上の万物を消滅する目的で使用されることはない
と保証されねばならない。

既に萎えていた日本帝国を平伏させた二個
の原子爆弾の炸裂から一年余りが過ぎた。あの
二発の爆発の残響音はいまなおアメリカ国会議事

堂、英国議会そしてクレムリンを突き抜け響き渡っている。国民の安寧と主権を守る責務を負う政府の有る所、それがどこであれあの轟音はまだ聞こえている。何百万という世界市民の心の中には、将来自分達に、町に、そして自分達の子供らにやってくる来ずには済まないかもしれないことへの不気味な恐れがある。

しかし、我々アメリカ人は西欧やロシアの人々ほどには総じて将来を危惧してはいないと私は思う。なぜそうなのかは、良く分かる。理屈は、不健全な理屈だが次のようなものだ：

我々は兵器とその秘密を所持している。我々には科学者がおり、それを製造した産業がある。それは実際、心配なことではあるが、原子のジレンマを何処へどのように導くかは我々の仕事のようにみえる。だから余り心配はすまい。こうした問題は、いつも何とかされてきたし、今後も何とかなるであろう。どこかの国が我々に追いついて来るまでには、我々の秘密を教えなければだが、我々は恐らく防衛システムを作り、今のものにとって代るより良い兵器を持っているであろう。その間然し、誰からのどんな愚行も絶対に許してはならない。

私が願うのは、この理論に沿って言える最悪の事態は、それが誤りであることである。だがそれより遥かに悪い——危険であり、容易に自己破壊を犯す様態となりうる。

事実は、むしろ次ぎのようなものである：

原爆は2年の間、或いはもしかしたら4年、我々だけが手中にしているのかもしれない。その製造を可能にした根本的概念を生み出した科学者達は、ヨーロッパ人であり、それを発見し、理論を形作り、1895年から1939年の間に出版したのである。他国をその軍事力強化にばく進させる最も確かな方法は、どんなに間接的であろうが彼らに対して原爆使用の脅しをかけることである。最

後に、アメリカを含め如何なる国にとっても、核攻撃に対する確かな防衛の方法は考えうる限り存在しない。

原子爆弾に対する防衛はできない。つまり、それが目標に届くまでに確実に止める方法が無いし又、目標に届く前に爆弾を自動的に爆発させるような製造方法のヒントも無いという意味だ。実際の所、原爆であろうとあるまいとどのような爆弾に対しても防衛はできないのだ。原爆となると、ただ確率が違うと言うに過ぎない。半数が、4分の3が、或いは極めて幸運にも99パーセントが途中で遮られる、としたらどうだ。着弾したのは100発目、その1発で数十万人都市が完全に破壊される——これでは効果的な防衛とはいえない。

古くからの論争がある。新たな攻撃兵器ができるや必ずその防衛手段が開発される——次ぎに戦争が起きれば世界は終わりだというセオリーは、大砲ができ、航空機、タンク、毒ガスなどが戦争に用いられるようになり前進した。然し言葉はトリッキーだし、理論は間違っている。これら如何なる兵器に対しても100パーセント有効な防衛は無い。いわゆる旧式の広島タイプを含め原子爆弾が都市を見舞うことは絶対無いと保証できるのでなければ、我々が核兵器から守られていると知ったかぶりをその人はほんとに言えないのである。幾度となく指摘されてきたが、アメリカは核兵器が使用されるような戦争ではとりわけ攻撃に対して脆弱だろう。それは人口や産業が大都市に点在する小さな区域に集中しているからである。

受け入れ可能な唯一の問題解決法は、原子エネルギーの有効な国際管理を構築する事にある。結局、その実現に向け有効な世界的合意が得られるようリーダーシップを取らねばならないのは我々アメリカであることを覚えておくこと。こうした合意は、如何なる国も他国に対し、大国小国を問

わず、原爆使用が絶対に不可能となるものでなければならぬ。原爆を製造したのは我々であるから、責任は先ず我々に在る—我々はそれを使用した—もっと造る設備も在る—今有利にその設備を

リン・シバース元館長をWFCに迎えて
ポーリーン・ヘス

4月8日に広島を訪れたリン・シバース元館長をWFCに迎えました。理事会の後、当時交友のあった方を含めた友達が集まりリンとともに夕食のテーブルを囲みました。リンはバーバラとともに1966年から67年にかけて館長を務め、1986年には再度4ヶ月間臨時に館長を勤めました。リンはWFC初期の時代のバーバラや他のリーダーたちとの体験談を語ってくれました。広島に滞在した後、多くの旧友に会うために長崎を訪れました。長崎の被爆者との旧交を温めその土産話を広島に持ち帰ってくれました。リンは次回の友愛に彼女の考えをまとめた記事を寄せてくれる予定です。

ラリー&アリス・ピートリー夫妻が
5月、6月に臨時の館長を勤める

ドン&ポーリーン現館長が家族や友人に会うために帰国して不在の間、ラリー&アリス・ピートリー夫妻が30日間臨時の館長になってくれることを快く承諾してくれました。アリスとラリーはWFCが現在の場所に移転した1995年から1997年の間館長を勤め、ジョエル&ベブ・アイカンベリー館長の就任前にも臨時の館長になりました。またWFCのアメリカ委員会の委員でもあり、WFCの館長選出にも協力してくださっています。多くの皆さんが二人に会うのを楽しみにしておられることと思います。二人は5月16日に日本に到着し、5月23日からドンとポーリーンが帰ってくる6月19日まで館長の任務につきます。私たちは日本とアメリカ

利用している。世界の大部分の目には、だからアメリカが彼らの安全保証と世界平和にとっての最大の脅威と映っている。

の両方でWFCに多大な貢献をされているベテラン館長をお迎えできてうれしく思います。

春の大掃除

冬から春に季節が変わり、WFCメンバー・スタッフ14人が毎年恒例の大掃除を行いました。冬のじゅうたんはきれいにして片付け、畳や窓をふき、センター内の大掃除をしました。それから、アメリカ風ランチ（ホットドック、ポテトチップ、サラダ、コーラ）を皆で楽しみました。大掃除を手伝ってくれた皆様、本当にありがとうございました。

ボブの死

1992、93年とWFCの館長を務めたボブ・バウアーさんが、去る4月14日、インディアナ州のレポートで逝去されました。遺族である夫人のリズさん、息子のリチャードさん、娘のベスさん、そして3人のお孫さんに、心からお悔やみ申し上げます。リズさんは昨年8月にWFCの40周年記念祝賀会に出席されましたが、ボブさんは来られませんでした。



ボブさんは1929年にオハイオ州のセリナで生まれました。小学校の教師を退職された後も、熱心なブレズレン教会のメンバーで、教会だけでなくさまざまな社会活動にボランティアとして参加し、恵まれない人たちのために力を尽くされました。また、クロスステッチが趣味で、作品の一つが今でもWFCのリビングルームに飾られています。ボブさんの作品をお持ちの方がおられましたら、その写真をコピーしてリズさんに送ってあげてください。

WFC 一同、慎んで哀悼の意を表します。

リズさんの連絡先をお知らせします。

住所 PO BOX 1637 La Porte, IN. 46350

電話 574-362-9182

E-Mail lizhobau100@hotmail.com



ボブ・バウアーさんからのプレゼント

広島旅行記

スーザン ルシアー

多くの外国人が考えるように、広島に行って自分の国がこの町に与えた恐るべき犯罪に対して謝罪したいというのが、私がこの町を訪問した動機でした。ところが、それは不可能であるばかりか、必要のないことだということを、私は実感したのです。

なるほど、私は平和公園に行って、多くの人々が原爆の犠牲者に哀悼と尊敬の念を捧げている姿に接しました。しかし、と同時に私が目にしたのは、そこで走り回っている子供たちや、碁を楽しんでいるお年寄りや、ピクニックに興じている人たちでした。深刻な顔をして歩いているのはみんな外国人でした。私は、こんな忌まわしい過去を持つ場所に住む人たちは、過去にとらわれることなくみんな前を向いて進んでいくほかないのだろうかと思うのです。

もちろん、広島の人たちは、決してあの悲惨な過去の出来事を忘れはしないでしょう。しかし、今、日本では、自衛隊がさらなる勢いで増強されており、憲法の平和をうたった条文が変えられようとしており、日本は独自に核兵器を開発すべきであるという人さえいる、ということです。きっと日本人は北朝鮮のことを心配しているのでしょう。でも、日本でも外国でもそれは問題にならないことです。私たちは広島の悲劇を忘れることは出来ないのです。たとえ今、広島がどんなに美しく明るい町になり、市民が美術館や公園やラーメン屋さんや商店街など、日常の平和な賑やかな生活を楽しんでいようと。

こんな日常の中にありながら、平和公園や原爆ドームは、戦争が如何に愚かしいものであるかをいつも私たちに思い出させます。私たちは広島や長崎の原爆犠牲者を慎みをもって追悼しなくてはなりません。死者を悼むということは、このような悲劇を二度と起こさないことを誓うことです。私が広島で会った人たちは、加害者であるアメリカ人に対して恨みを抱いてはいませんでした。だから、そのことで私たちは広島に対してやましさを感ずる必要はないのです。むしろ、私たちが今でも核兵器を所有していること、そして世界の国々に戦争を仕掛けていることに罪悪感と自責の思いを持たなくてはなりません。そうすることが広島、長崎

に対して罪滅ぼしをする最善の方法なのです。

友愛ボランティアのみなさま

翻訳: 山下美枝子、山根美智子、平本隆子

佐久間佳子、平岡佐知子

編集: 英語 Don Hess

日本語 浜井道子



森下さんと山岡さんにプレゼントをする
リン・シバズさん



ピースクエアの練習



岡田さんとドン館長が HANWA の総会に参加



山岡さんが関西外大の学生に被爆証言



金曜日の英会話クラスとのお花見



信ちゃんと幼いゲスト